

21

研医会図書館所蔵 16 世紀から 19 世紀の 西洋医書および科学書

安部 郁子

公益財団法人 研医会

研医会図書館には、16 世紀から 19 世紀の西洋医学書や科学書が 160 点ある（目録上）。中には歴史の中で重要とされる書籍もあるので、ご報告する。

【方法】

近年、海洋を渡っての世界的な人々の交流については研究が進んでおり、現代の私たちが考える以上に人類は古くから船をつかって交流し、物や文化を動かしてきたということが明らかになっている。そこで、そうした著作や資料を読み、合わせて医学の歴史のポイントを確認する。そのうえで、研医会図書館に所蔵される西洋医学の書籍が、どのような位置にあったものなのかを考える。

【結果と考察】

Theophrasti: De Historia Plantarvm (1522) 『植物誌』

Dioscoridis, Pedacii: Pedacii Dioscoridis Anazarbaei Opera quae extant Omnia (1598)

Hippocrates: Hippocratis Opera Omnia ex jani cornarii versione una cum Jo. Marinelli Commentariis ac petri matthaei pini indice. Tomus 1-2 (1737)

上記の 3 書は元は古代ギリシャで書かれた科学書である。では全てがそのまま欧州に残って伝えられたかと言えばそうではなく、シリア語、ヘブライ語、アラビア語に翻訳され、中世にはむしろアラブ人たちがその学問を深めていた。チャールズ・H・ハスキンスは『十二世紀のルネサンス ヨーロッパの目覚め』の中で「中世初期のもっとも活発な科学、哲学の活動は、医学、数学にせよ、天文学、占星術、錬金術にせよマホメットの国が舞台だった。」と述べている。7 世紀以降北アフリカはイスラム化し、9～10 世紀にイベリア半島に入ったアラブ人たちの学問や芸術は欧州文化の基となっている。またシチリアは 902 年から 1091 年までアラブの支配を受け、その後はノルマン人が支配するが、ここはアラビアの学問を欧州の言葉に翻訳する中心地であった。12～13 世紀、欧州の学者たちはスペインを目指し、そこにあったアラビアの学問を吸収する。その中心地はトレドであった。

Kempfer, Engelbert: Amoenitatum Exoticarum Politico-Physico-Medicarum Fasciculi V, Variae Relationes Observationes & Descriptiones Rerum Persicarum ulterioris Asiae (1712) 『廻国奇観』

ケンペル (1651-1716) はペルシアのサファヴィー朝への使節団に医師兼秘書として随行し、彼の地の文化をドイツに伝えた。このケンペルの著作をゲーテ (1749-1832) やカントも読むことになるが、「イタリアのハーブメディシンはゲーテの頃、ドイツから伝わった」ということをイタリア大使夫人 (医師) に聞いた。東方世界にある医学がドイツを回りイタリアへ到達したのかもしれない。文化の流れは大変面白いものである。

Keill, John: Natuur-En Sterrekunde (Inleidinge tot de Waare of de Natuur-en Sterrekundige Lessen) (1741) 『天文学・物理学入門』(Johan Lulofs オランダ語訳)

コペルニクス (1473-1543) の著書には、ナスィールディーン・トゥーサー (~1274) の天体モデルの絵があり、地動説はイスラム天文学の知識なしでは生まれなかったと考えられている。その後、ガリレオ (1564-1642) を経て、ニュートン (1642-1727) の Philosophiae Naturalis Principia Mathematica (1687 年『自然哲学の数学的諸原理』) で地動説は完全なものとなる。上記の John Keill はニュートンの弟子。長崎通詞をしていた志筑忠雄は上記 Keill の著作の蘭語訳 “Inleidinge tot de Waare Natuur-en Sterrekundige Lessen” などを利用し、『暦象新書』を訳出した。以上太字の 5 点のみだが、ご紹介する。